ごめんください
山田の
姉さんの家は
こちらで
しょうか

りゅうちゃん!

姉さん………

………実は…

おじさん！おじさん！

おじさん

おじさんはお母さんの何にあたるの
何故おっさんの事聞くの……
おじさんはいったい誰！

おっさんと何かあるの？

恩！

人カラ ウケタ オン ヲ ワスレズ、ジブンノ コト ハ ジブン デシ、イツモ テンノウ ヘイカ ノ ゴオン ヲ アリガタク・・・

花の紋章

花シリーズ第2話第2回

林 静一

この世に、咲く花
かずかず　あれど
昔、実のなる　花
を　見た、・
今じゃ　この世の
こぼれ花・・・
あ～あ　東京流れ
の　くるい花

美川君たらね！エッチなのよ

あいつエッチ人間よ！

校長と教頭は叫んだ！

生徒諸君
今日は
学校が
あります
各自
教室に
帰って
自習を
しなさい！

これ!
見ようぜ!

島田さんの手紙に重大な話がと書いておられたが…

君知ってるかね？

う～むまずいな字が死んでおる

さあ〜
わしの会社に
組合が出来おった
皇太子殿下
ご結婚に
組合に赤旗なんぞ
あげさせせん！
わしの目の
黒いうちは…
一本も…

こぼれ花

あんた
逃げてよ！
来たんだよ！
あいつが
早く！
裏から
早く早く！
着いたら便り
をおくれよ…

かったかった
かったかったかった

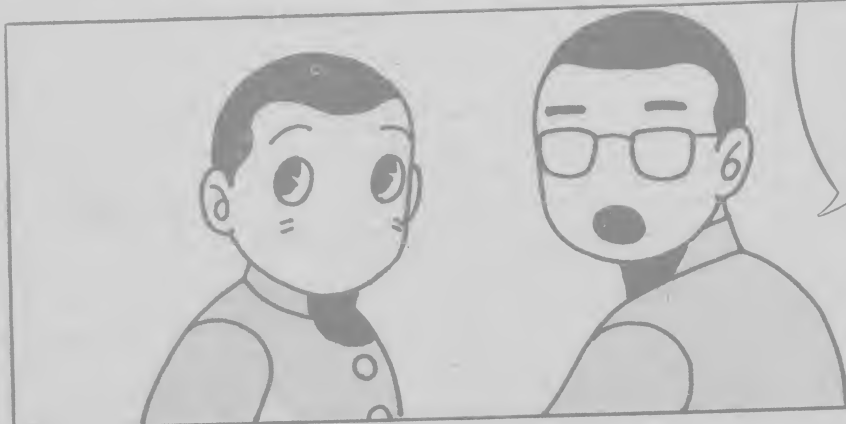
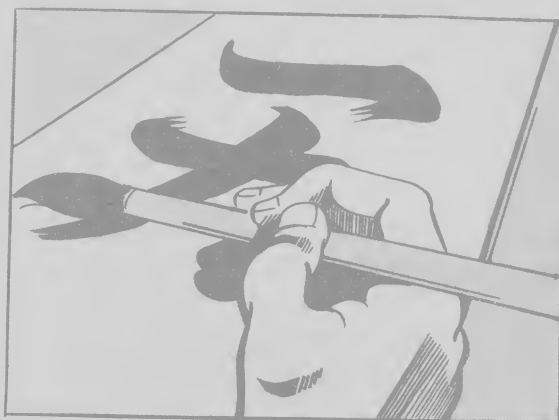
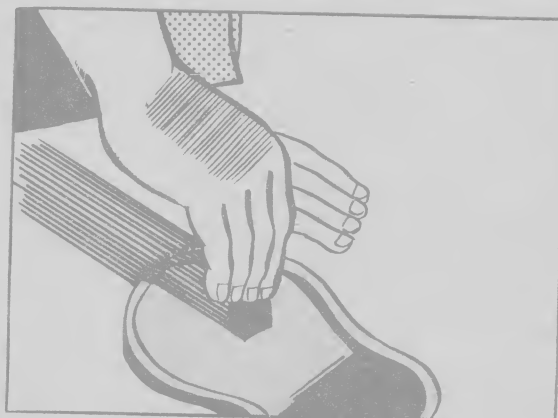
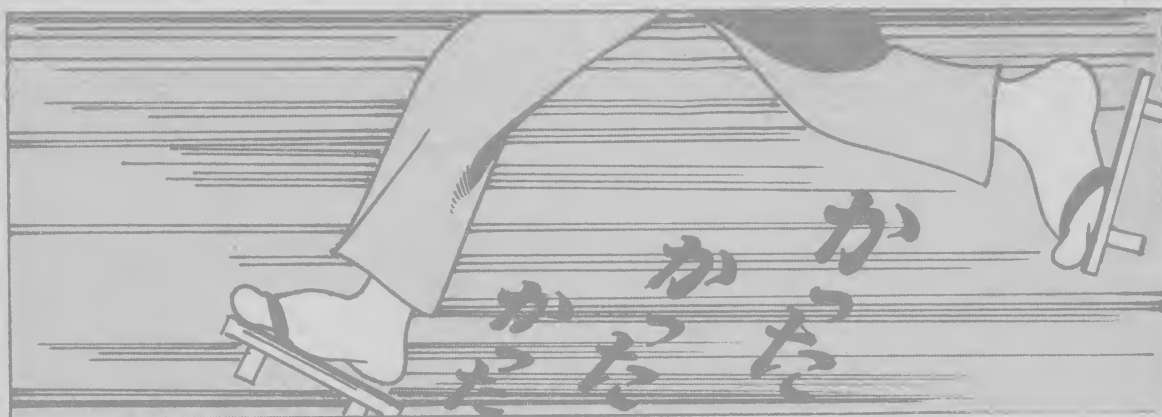
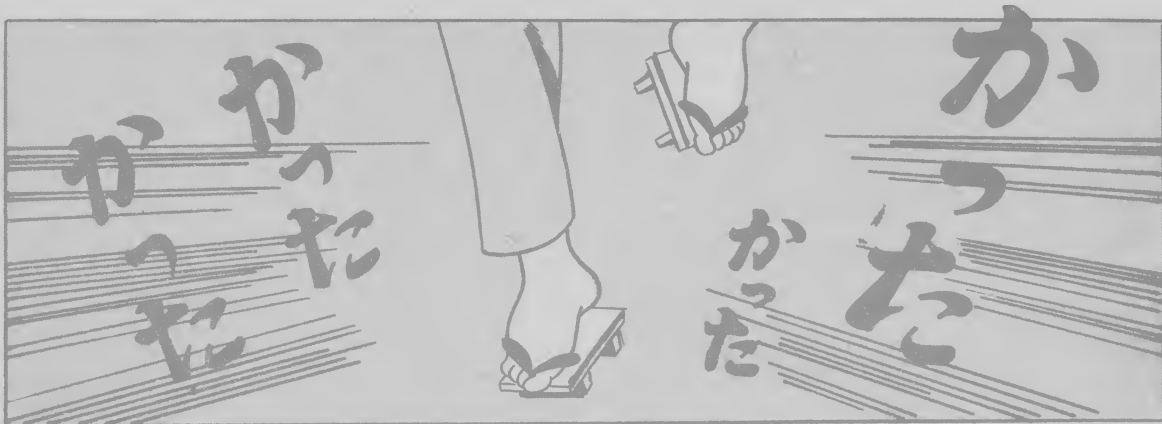
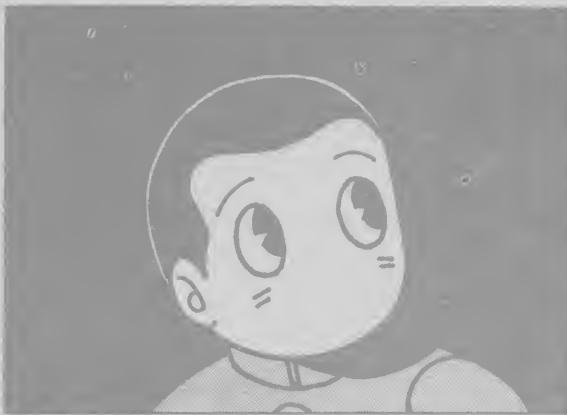
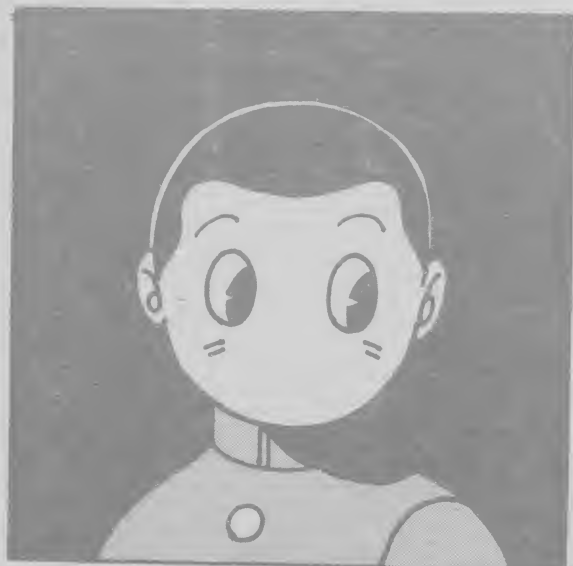
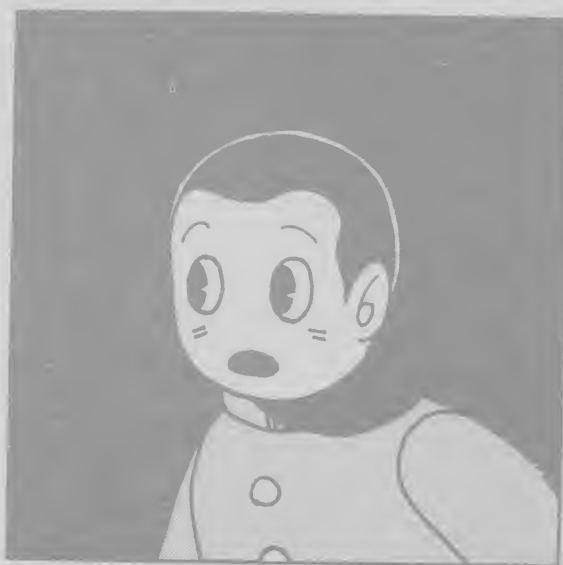
おじさん!

かった
かった
かった

かった
かった

ぴぴ

おじさん…

花の紋章オ3回へつづく。

〈ガロ〉への常識的感想

杉野元一（東京）

エレキ、ミニ・スカート、寄席、アングラ、新興宗教、万国博、等の「ブーム」。また漫画ブームでもあると聞く。これまでに様々のブームが湧き起こった。ある時は、大きな輪を奇妙な姿勢で回転させる遊戯が津波のごとく流行したかと思うと、少女達がまた真黒なビニール製の人形をペットのごとくに傍に抱えることも流行した。

もとより「流行」は発生しだすと、巨大な形で、熱病のごとくに、急激に音をたてて波及してゆくのである。そこには批判力や判断力を挟む余地のないほどに速力を持っている。そして栄枯盛衰の鉄則に従い、やがては大方、〝パワー〟を喪失してゆくのが常である。とにかく適当に合理化（正当化）の作業をし、商品として波に乗せるのが、各企業の最重点的な「使命」となっている。偶像は自然発生的に出現するのではなくて、作成されてゆくのである。

「そいつはマンガ的だ!!」という発想は、しばしば大勢の人達にとられてきた。そこにはある種の軽蔑の念すらが、含まれているようであった。長年、城壁のように固定化してしまった漫画であった。新方向を見出す〝余地〟すら生れ得なかった。立っている位置が明白であるから、漫画への認識不足が続いたのだった。

これほどにメディアが多様化し、氾濫しているけれども、性格上、大した違いがないのが、今日の姿である。メディア内部で深刻な事件が相続き起こっている状勢である。事態の本質をなるべく、覆い隠そうとする風潮がとみに盛んになってきたようだ。

《ガロ》――この風変りな題名を持つ雑誌は、既存の認識を見事に粉砕してしまい、整理された形で、現代のパトス（流行語であるが…）に肉迫するのである。

池の水をザルで掬っているようなメディア・ラシュのなかに、《ガロ》の存在は貴重であり、多くの人々に愛好され、読まれるのはそんな所にあるようだ。ブームが終結した後に、自立することが可能なのは、《ガロ》のみかも知れない。出発点から「ブーム」とは無関係であったのだった。

〝御注文〟があります

倉橋健三郎（東京・19歳）

ガロの九・十月号を読んで思う事だが、「カムイ伝」は、二十回位までは真面目に読んでいたのであるがもう読む気がしなくなった。ここらで、白土三平氏も少しの間休んで、時間をかけてじっくりとした物を書いてもらいたい。「カムイ伝」はサルトルの「自由への道」のように、未完で終わってもかまわないと思う。絵がすこぶる乱れている。どうしても書かねばならぬ事もおありかと思うが、少し白々しいと思う事がある。線はもっと強く、重みを持って書いてもらいたい。

林静一氏は、驚くべき高度成長を示してくれた。「山姥子守唄」はすばらしい作品である。ただ時たまでてくる横尾忠則のような（それもしかたないだろうが）背景には不満である。

日野日出志氏のマンガはさっぱり面白くない。なぜ二十数ページを費して、熱帯魚を描かねばならないのだろうか。コマの無駄、人物の一面性が目立つ。でも「埴輪」はかなり良い。

「はにわの世界」の田代氏は本当に素的な人である。こういう人がぜひいなければならない。他の人々も、彼の存在を忘れてはならない。

つりたくにこ嬢は、つまらないナンセンスものはやめて、絵は達者なのだからもっと真面目にとっくんでほしい。マルキ・ド・サドを読みすきて頭がおかしくなったのかも知れない。

赤坂一郎氏は、「コム」の予備校に入ってから絵にたいした変化が見られないのが残念。

水木しげる氏は、もうアイデアが古い。氏の昔の愛読した単行本「地獄の水」に連なる部分が多い。もっとも手塚治虫流のスター再出法なら問題ないか。

佐々木マキ氏についてはなにも言う事はない。

では、次号の「ガロ」に期待して筆をおくことにする。請求書をお待ちしております。

権威への反抗を喪失

細川みつこ（京都）

既成の権威に対する反抗――それが、以前の「ガロ」の根底には流れていたと思う。白土三平氏は、江戸時代の社会機構を、農民、非人、忍者等、法の外に生きるものの目を通して描くことにより、その矛盾を鋭く指摘し、新たな歴史を作り出したし、又、水木しげる氏の鬼太郎も、誕生当時は巨大な現代社会に対して、自己の生存を守る為、必死の戦いを続けていた。いずれも虐げられた者の、生きんとする戦いであり、それが読者を強く感動させたのではなかったか。

ところが、この頃の「ガロ」は、権

威に対する戦いを止めたかのように見える「鬼太郎が妖怪王国の生意気なドラ息子に変化した如く、「ガロ」自身も安定を得て、次第に戦いから遠ざかり、甘い感傷にひたり始めたように思う。その事は、つげ義春氏の作品及び、類似の作品が読者にもてるという点にも現れている。

つげ氏の作品には種々のユニークな点やしみじみとした人情味等がある事は十分認めるが、しかし、氏の作品は飽くまでも幻想の世界に対するノスタルジアでしかない。故郷を失った現代人が、キクチサヨコや山合の湯泉場に郷愁を覚える気持は理解できるが、それは明らかに現実に背を向けた、逆向きの姿勢である。

進歩的なポーズをとりながらも、感傷の世界に傾いて行こうとする「ガロ」に、私は、裏切られたような感じを受ける。

つげ義春の土俗志向

木村定雄（京都）

つげ義春については本欄でもいろいろ言及されているが、彼の土俗志向の心性というものがあまり語られていないようなので、少しばかり読者の喚気を促したいと思う。彼の作品の内部を殆ど一貫して流れる情念は、たとえば柳田国男の『遠野物語』に書きとめられているような薄暗い民譚の世界へと傾斜している。それは彼の作品の頂点をなす「沼」や「ねじ式」において端的に示されているところである。

もちろんこうした点に気付き、「ねじ式」が書かれる次前に、いち早く石子氏がつげ義春の世界を〈アンチ存在論的〉としてカフカを引用されたのは卓見だが、それにしても極度なまでに民譚に対する固執を示す、いわば彼の薄暮の感性を、強引に論理化してしまったという感を免れ難い。たといそれが批評の持つ心要悪であったとしても、だ。

うたて此世はをぐらきを
何しにわれはさめつらむ
いざ今いち度かへらばや
うつくしかりし夢の世に
『夕ぐれに眠りのさめし時』

柳田国男の詩とつげ義春の世界とを単純にオーバー・ラップすることは、軽卒のそしりを免れまい。しかし、それは普通よく言われているような「出家遁世の隠者」の境地ではない。彼も又柳田と同様に一つの徴候を求めて、民譚の世界をさまよい歩いている。

こうしたつげ義春の土俗志向を、現代流行の疎外論を機軸にして追求したり、「ねじ式」の医者を求めてさ迷う主人公の姿を、フロイト的に作者の幼児体験から解明しようと考えるのもけっこうだが、私はここでは、彼の描く世界が現代人の沈黙の領域における心性を過たず捉えていることだけを指摘するにとどめておく。私見では、カフカ的な夢の短絡論理によって描出された「ねじ式」の、〈生〉の不条理な影絵芝居を現在までの最高到達点とする、つげ義春の世界と交感し得るには、ただ沈黙の体験を自己の内部でひたすら守ってゆこうとする精神のあり方に耐えてゆく以外にはないような気がする。

最後に、十月号の入選作、仲佳子さんの「海ほおずき」は、まだ文学少女的発想が残っているとは言え、絵も内容も新人としては出色の出来ばえだ。今後を期待したい。

「ガンバレ」つげ義春

神山　亨（栃木・15歳）

近ごろのつげ氏の作品には、「ゲンセンカン主人」や「ねじ式」と「通夜」や「李さん一家」など二つのちがった傾向が見られるが、「ゲンセンカン主人」では、夕ぐれのある町を通りかかった旅人が自分の前世に会い、そして同じ時間、同じ空間に同じ二つの物体の存在はゆるされない、そこでとつぜん風が生じ二人は破壊される。

私としては、彼に「ゲンセンカン主人」調のものよりも「通夜」などのような感じのものを書いてほしいと思っている。くらさの中のなにかほのぼのとした明るさ、そしてその文学めいた何か？　これがつげ氏の魅力なのだろうか。

佐々木マキ氏だが、彼は音のないマンガで、彼特有の画家ダリのような感じの絵で、私たちを彼の夢の中にさそう。私は彼のマンガの中で、特に「アンリとアンヌのバラード」「セブンティーン」などが好きである。「セブンティーン」では大人になりきれない、しかし子どもでもない十七才の苦しみ、そして恋……

10月号にマキ氏の「殺人者」は、何の意義もない、といった人がいたが、彼にはマキ氏のマンガが、いやヘミングウェイの作品が理解できないのであります。それにマンガとは、意義がなければつまらない、と考えている人がずいぶんいるようだが、私は、マンガとは、単に感じるもの、でよいのだと思います。ツリタクニコ女史の作品を初めて拝見した時、私は、おろかな女族の中に、こんなすばらしいものをかく人がいるのかと、驚いたが、しばらく拝見しているうちに、やはり女だな、と思わせるようなところが出てきて、少しがっかりした。

今私が、いちばん期待しているのは、林静一氏で、彼は、無限の可能性をもつマンガ家の一人である。現在における彼の絵は、何かペーソス（もの悲しさ）を感じる。そしてそのペーソスの中に、現代人の心、そして歌……とにかく「ガロ」はすばらしい雑誌だと、私は思っている。これからもすばらしい作品を作ってください。期待しています。

●営業部から
最近、当社への郵便物不着の事故が目立っています。まだお手元にご注文の品が到着していない方がありましたら至急お知らせ下さい。なお、当社へのご送金は、書留か小為替をご利用下さい。現金は封入しないで下さい。